

# せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福社会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成28年 10月 第188号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

## 『保育・障害・老人』の融合で命の循環社会を

人間社会は、一人ひとりの『限りある命』を繋いで、歴史を続けて来ました。『死んだら終い』ではなく『輪廻転生』。『限りある命を繋ぐ』為に人は、遺伝子で引継ぐ生物的な『基本情報』と共に、『社会を構成』して生きる為の『基本姿勢』として、遺伝子では伝わらない『思想や人間性や社会性』を引継いで来ました。『自らの命と引替』に、『命より大切なもの』を伝えて来たのです。

糸賀一雄先生の『この子らを世の光に』から半世紀が過ぎて尚、今も障害児を産む母親の苦悩は続き、出生前診断でダウン症と確定した胎児の94%は中絶されています。50年前も今も、障害者は社会で歓迎されない存在です。

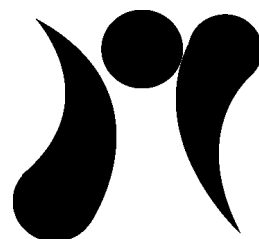
介護保険制度では、老いても要介護に成らない努力を重視し、『健康寿命を延ばそう』と心身の活性化を図る試みに加算します。高齢予備軍はひたすら、要介護にも認知症にも成らない様にと、健康への努力を続けます。その一方で、『介護は迷惑』との意識が拡がり、要介護になった老人は肩身が狭く、家族や介護者による虐待や無理心中も後を絶ちません。

「老いて要介護になる事を避けたい」、「障害のある子の出産を避けたい」、と避ける努力を優先する『世間の常識』が、『介護は迷惑』と視る意識を生み、障害者を歓迎しない『世相』を創り、その存在を否定する「歪な思想」や「虐待」の後押しをしているように感じます。

更には、『老いの先に必ずある死』についても『意識の外』に押しやり、『死を受容れる思想』が育たず、最後の最後まで『死を避ける努力』を続けて高齢者医療費が増大し、『経済的負担』が若い人達に重く押し掛かります。

人間は、自然や社会が如何ように『変化』しようとも『柔軟に生き抜く生命力』と『多様な社会性』を身に着け、幾多の自然災害や戦争の中を、『しなやかに逞しく』生き抜いて社会を創り、幸せを追い求め、歴史を続けて来ました。その『変化を受容れる暮らし』の中に、遺伝子では引継げない『思想や社会性』を引継ぐ為の『重要な営み』が潜んでいるのだと思います。

人間にとって最も大きな変化が、『自然災害』であり、『理不



尽で不合理な戦争』です。地震や台風・火山噴火で家も街も失い、多くの人が亡くなります。内戦や侵略で故郷が壊れ、死者や難民が溢れます。其れでも人は、家を建て、集落を創り、土地を耕し、逞しく生きて来ました。『如何ような変化』に対しても、『如何ような悲しみ』の中からも、柔軟にしなやかに生き抜く力を、人間は備えています。人は、『悲しみ』をエネルギーに変えて力を蓄え、『吾身を愛おしむ心』を養い、しなやかに、逞しく、幸せを求めて生きるのです。

もう一つの変化が、自らの『老いと死』です。永く生きる程に体力が低下し、様々な事柄が出来難くなり、病気にも罹り易くなります。様々な葛藤を抱え、苦悩しながら、『自らの死』を受容れ、次の世代の人々に其の身を委ねて『介護』を任せます。その『介護と最期』を任された人々も又、葛藤と苦悩を重ねながら、『死後にも続く関係と幸せ』に気付き、最期に備える『思想と覚悟』を学び、『柔軟に変化し得る社会性』を受継ぐのです。

更に一つ、想定外の変化として『生れながらに障害を持つ子』との出逢いがあります。授かった命に障害があると判った時、両親の驚きと葛藤、その仲間達の戸惑いの中で人は、『多様な命の存在』を受容れ、『多様で柔軟な社会』の在り様を学びました。『障害者との共生』を通して『柔軟に変化し得る人と社会』への途を拓きました。人間が柔軟に社会を引継ぎ歴史が続く『原点』として、生れながらの障害児はやはり、『世を照らす光』でした。

7月26日未明、相模原市で障害者施設が襲われ、『障害者の存在』を否定する「歪な思想と行為」に愕然とすると同時に、その行為の裏側に、『健康志向一辺倒』の『世相』の『危うさ』を感じます。

今、いとも簡単に子供が自殺します。仲間外れにされ、いじめられた子供が、反撃もせず、逃げもせず、狭い世界に自らを追い込み、自殺に向かう心境に心が痛みます。仲間内のいざこざで、安易に仲間を死に追いやる少年達の事件が次々と起こります。そして何より、自身の暮らしに配偶者や子の存在を望まぬ若者が増え、その淡泊で希薄な社会性に『何かを変だ』と感じます。

一方で、介護の現場で出会う要介護老人達の『しなやかで逞しい生活力と生命力』が子供達に伝わらない『もどかしさ』を強く感じます。認知症のお年寄りが随所で示す『多様で柔軟な社会性』を、少しでも子供達に伝えたい、と切に願います。認知症老人もやはり『世を照らす光』なのです。

『三つ子の魂百まで』、『幼児体験』は永い人生を支える思想や社会性の基盤と成る、貴重な経験です。子供達の心の中に、命と命の繋がりを感じ取る感性を育む、重要な営みです。幼児には、要介護や認知症のお年寄りとの出逢いや、障害者との触れ合いが在る暮らし、が必要な様に強く感じています。

老人は、自らの命と引替に『人生の果実』を子供達に引継ぎます。障害者が、持てる力のベストを尽くして懸命に生きる姿は、多様で柔軟な社会の『象徴』です。老人や障害者の放つ光が幼児の心に宿り、やがては大きく膨らみ、その一生涯を支えて、更に次の世代に引継がれ、歴史が続きます。今、『社会福祉法人』の大きな転換期を迎えて、『幼児保育・障害者福祉・老人介護』の各事業が融合した『一体的な運営』が求められる時代に成った、と感じます。

高齢期に入った団塊の一員として、『我が人生の果実』を『介護を通して』子や孫や後輩達に引き継ぎたいと願い、其れまでに『介護が迷惑ではない社会』を創っておきたい、と切に願います。

## 介護についてみんなで語ろう会（9月23日）



### 「疲れない体の使い方 ～応用編～」(介護技術講習会)

先月に引き続き、介護技術講習会を行いました。

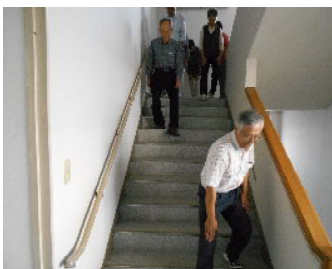
今回は、「疲れない体の使い方」として、腕を動かす時は肩甲骨、腰や足を動かす時は股関節からと、基となるところを動かせば、一点に負担が集中しないというお話でした。

今回は食器洗い・浴槽掃除・ゴミ出し・掃除機かけ・布団や重い荷物を持つとき・椅子から立つ・リュックの背負い方・排泄しやすい姿勢・階段の上り下り・高い所のものをとる、など何気ない生活動作に日頃の習慣が身について、足腰、腕や手首に負担がかかっているの、理にかなった体の使い方、疲れない作業になることを参加者で体感しました。

参加者の方より、昔は歩く時、行進ではなく、足を出す方の手も一緒に出すと、疲れにくく長距離歩けていた、というお話を聞きました。お年寄りの動きを見ていると、私たちからすると動きにくそうに見えますが、自分の太ももに手を置いたり、腰に両手を組んだり自然とバランスをとり、自分に合った楽な姿勢をとっているのだと改めて感じることができました。そのご自身がとられている絶妙なバランスを信頼し、介助者が手を出すことで奪わないようにしたいものです。

椅子や車椅子からの立ち上がりも、“立つのだから上”にと勘違いしているのかもしれませんが。人間は立つとき自然と足元を引き、頭を少し前に体をまあるく傾けて立ち上がっています。参加者の方に無意識に立ち上がってもらい、動画で撮影をしたところ見事に人間の持つ本能のまま、理にかなった動きをされていました。介助、介護するとき、又、されるときにもこの自然な動きのままに身を任せれば双方に負担がかかりにくいことを参加した職員も再認識しました。

参加者の方より、在宅で介護されていて困っていることの相談があり、サ高住の部屋を利用し、ベッドや車いすからの移乗をスライディングシートやボードを使った介助方法を職員と共に学びました。職員が日々行っている介護の技術を、在宅で生活されている方と共有す



ること、そしてそのやり取りの中で生活されているイメージを作りあげる事でご本人とご家族、職員が創意工夫して考えるという事に繋がっていくものだと思います。地域の方々に参加していただいで交流することで介護職の発信の場として大切にしていきたいと考えます。

(老人介護支援センター 福田 真希)

### 【せいりょう園空き情報 平成28年 10月19日現在】

- ・サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」：  
A(19.07㎡) 9室、C(24.67㎡) 4室、D(25.16㎡) 2室、E(25.80㎡) 2室
- ・サービス付き高齢者向け住宅「リバティかがわ」：A(33㎡) 5室、C(39㎡) 1室
- ・ケアハウス：空きなし(バス・トイレ・キッチン付 24㎡)
- ・グループホーム：2室      ・グループホームまどか：1室

[問合せ] せいりょう園 TEL(079)421-7156/(079)424-3433

オーストラリアにおける地域包括医療・ケアについて

日程：平成28年9月10日（土）～9月17日（土）

看護師 石井朱美 ケアマネジャー 大野なるみ



- <日程> 9月12日（月）メルボルン市役所にて高齢者福祉・医療についての講義  
9月13日（火）非営利団体 新・老人の会（日本人を中心とした高齢者ケア）  
9月14日（水）バプティスト・ケア（高齢者ケアの総合的なサービス）  
オパール・エンデバー（認知症ケア、住居施設）  
9月15日（木）ユニティンク・ウェスリー・マンリー（在宅ケア）  
シドニー日本人会との交流  
ノース・ライド・ディメンシア・センター（認知症ケア）  
主催；公益社団法人 長寿社会文化協会（WAC）

<研修で学んだこと・知ったこと・見聞したこと等>

- オーストラリアは南半球にあり気候は春（3～4月）。時差1時間。日本の20倍の国土。
- 消費税は原材料（魚、肉、野菜、果物等）にはかからず、ハム、チーズなどの加工品になると10%。日本もこの方法を取り入れたらいいのにと考えた。
- 「888」のモニュメントがあった。「8時間労働・8時間余暇・8時間睡眠」を推奨するもので、それはなんと日本はまだ江戸時代の頃から言われていたそう。私はまるでタイムスリップしたかのように感じ、文化の違いを痛感した。
- 公衆トイレの中にある黄色いボックスは麻薬の注射針入れ。かつて麻薬使用者が使用後の針をトイレの床に落とし、それを踏んでエイズ等に感染する問題が多数あった。しないようにとか、落とさないようにとか注意勧告しても同じ。それなら、使用後の針を入れる箱を設置したことで激減。また、行政の窓口には、注射針を回し使いしての感染防止のため、新しい針を置いていて、そこに取りに来ても逮捕はしないとのこと。発想の転換が素晴らしいと思った。
- ボランティアは65歳以上が大半。中には80歳を超えた方も。助け合いは自然なことで社会に根付いている。きびしいトレーニングもあり責任も伴う。
- ビューティサロンがある施設があった。ネイルをしているお年寄りも多かった。ケアよりヘアセットやネイルの方が重要と考えている方も多いと。微笑ましいと感じた。
- 年金は一律同額。施設入所するなら年金の75%と決められており小遣いは残り25%のみ。タックスファイルナンバーというのがあり、政府は資産も銀行口座も出入国まで把握している。
- オーストラリアでもたくさんの薬を飲んでいる人はいるようだが、概ね75歳を過ぎたら本人の自己責任とし無理な服薬指導や食事制限はしないと。日本との大きな違い。
- 支援の手は高齢者等の弱者だけでなく、レズ、ゲイ、バイセクシャルも対象。すべての国民が差別を受けることなく「平等」に生活できることをめざしている。



- 認知症については本人・家族がテレビ、ラジオ、インターネット紙面、イベント等を通じ理解を促すよう発信していると聞いた。ステッカーシールもあった。日本の認知症サポーター養成講座を見習いたいとのこと。
- 徘徊の心配がある人は警察に申告することでチェーン式のブレスレットを付ける。それには名前や登録番号が記入されている。もし行方不明になってもブレスレットで認識でき、すぐにどこの誰かわかるようになっている。日本の警察に届け出るシステムと大きな違いを感じた。
- 在宅サービスの考え方は「本人ができなくなったことを手伝い、生活の中に入れていくこと」と考えるため、家事援助だけでなく化粧やお金の支払い、電気の交換、安全な通路の確保のため木の剪定等も含まれる。日本では日常生活の支援としているためできないことも多い。しかしその人の生活を考えると制限が多すぎると思う。
- 施設に医者がいるわけではなく、医療的な判断は看護師が中心となったチームで行う。そこにはフィジオセラピー（気ばらし療法）やレジャー&ライフセラピスト、ナースプロクティショナル（医者と看護師の間の資格）、足のセラピスト（特別な靴のあつらえ）などの聞きなれない職種や栄養士、ホームドクター（必要時）が存在している。
- リフトを使わないで移乗・移動の介助を行い腰痛を発症しても労災は認められない。スカイリフトのスリングシートも体格や状態に合わせた物が選択できるように何種類も準備されている。
- 地域包括ケアが法律化され政府も在宅ケアを勧めている。多国籍国家なので文化も習慣も食事も違うため同じ国の人が関わることが多い。日本人支援団体は日本食の共同購入や配食の生活支援などを行っている。

### <感想>

初めての海外研修に参加することができ、不安や慣れないことも多々ありましたが、とても有意義な時間を持てたことに感謝いたします。本当に沢山のことを見聞きし、教えてもらい学び、驚き、それらのことを一つでも伝えたい思いでいっぱいです。

オーストラリアには多種多様な言語、文化、食事、習慣を持つ多国籍の人が住み、自由のようであれ自己責任の国だと思いました。国民は国、州、市のそれぞれの政府の法律というルールのもとに保障される部分はあっても、不足の部分は自分達で補う生き方が染みついていると思いました。

オーストラリアも日本と同じように高齢化社会になってきているようで、一番良い方法を模索していることがわかりました。個人による選択権や自立が尊重され、自分の人生は自分で考え、子供に頼ることはもともと習慣にもないようです。施設へ入居を選択するという事は最期までいるということで、施設で最期を迎える割合が多いそうです。

また、ある施設で寝たきりの方の様子を見る機会がありましたが、他者に委ねる目はどの国も同じでしたが、施設で働く職員やボランティアさんの表情は明るくハッピーに見えました。それぞれに役割を理解し誇りを持って仕事をしていると感じました。

今回の研修は、いろいろなことを考える機会になり、多くのことを得ることができました。





ユニット型特養で看取りを経験されたご家族より、  
御手紙が届きました。  
ご了承の上、記載させていただきます。



さわやかな季節となりましたが、皆様お変わりないことと存じます。祖母の葬儀では、施設長様はじめ、お忙しい中、多くの職員の方々にご会葬頂き、心よりお礼申し上げます。

本日、9月11日（三十五日法要）、祖母河野常子の埋葬を無事終える事が出来ました。改めてせいりょう園職員の皆様にお礼の気持ちをお伝え致したく、筆を執らせて頂きます。

振り返れば、祖母がユニット型特養に入所致しましたのも、6年前の9月11日でした。入所までにも、将来的なことを見据えて、加古川市内の他の施設と並行して、せいりょう園のデイサービスを利用させていただく中で、祖父と母は、せいりょう園への入所を強く希望しておりました。

幼少期からお嬢様育ちだった祖母は、一人でのお留守番、一人でのお出かけが得意ではなく、それは認知症が進んでからも例外なく、デイサービスへも気が進まない様子でした。

だからこそ家族が通いやすく、より家で過ごす環境に近い形で、家庭的な雰囲気・・・という思いが、祖父をはじめ家族みんなの強い希望でした。

入所してからの祖母は認知症が進んでいたとはいえ、笑顔も多く、職員の皆様からも「いつも笑顔に癒されます」とおっしゃっていただけるような生活を送っていました。

ただ唯一、お食事に関しては、口に合わないものだと食べない、口を開けない、開けたと思ったらスプーンを噛んで離さないなど、意思のはっきりした性格の為、職員の皆様にご迷惑をおかけしたと思います。

しかし祖母の死後、そのことを懐かしんでお話し下さる職員の皆様の言葉から、いかに、家族のように向き合って接していただいていたかということ、改めて痛感致しました。

ユニットの施設内はいつも、お出汁の香りや煮魚の香りなど、面会に行った私たちまでお腹が鳴りそうな、美味しそうなお食事の香りにいつも包まれていたことが、不思議と私たち家族に安心感を与えて下さいました。

きっと、入所されている方々も同じ思いでいらっしやると思います。お食事の後の口腔ケア、オムツ替えも決して流れ作業的なものではなく、すべてにおいて祖母がどうすれば気持ちよく過ごせるか、ということ、第一に考えて下さっていることが傍で見ていてよくわかりました。

そんな、お忙しい合間を縫って、クリスマスやお誕生日の時などは、いつも手作りのカードを作って下さり、そのメッセージからも職員の皆様の温かい気持ちが伝わってきました。皆様から頂いたメッセージカードは、すべて祖母の棺に納めさせていただきました。

そして、祖母を思い出すと必ず顔が浮かぶ祖父は、祖母を看取するという思いが叶わないまま、3年前に急逝致しました。

一人が苦手な祖母を想い、自宅から、祖父は毎日、多い時には一日二回、祖母の好きな食べ物を持って、会いに行っていました。

若い頃は、お酒飲みの祖父に悩まされ、けんかをしている二人を孫である私も見てきましたが、どれほど認知症が進んでも、祖父自身の体力が落ちようとも、二日と日を空けることなく通う祖父の姿を、孫として尊敬し、微笑ましく二人を見ていました。

母もまた、祖父に代わってできる限り、祖母に会いに行っていました。

とはいえ、どうしても会いに行けない間、母が安心して、皆様にお任せできたのも、親身になって6年間変わることなく接して下さっていたからだ、と心から感謝しています。

そして、祖母が亡くなるまでの4日間、親族が入れ代わり立ち代わり祖母との時間を過ごし、また、祖母と母と私の三人、同じ部屋で話をし、食事をし、眠り、あれほど濃密な時間を過ごしたことは36年間の中で初めてだった、と今改めて思います。

今まで人の臨終に立ち会うことができずに生きてきましたが、食事ができなくなり、水だけになり、ゆっくりゆっくりとその日を迎えるということは、本人もさることながら、家族が死を受け入れるための心の準備期間のように感じました。

私たち家族がゆっくり眠れるようにと、一生懸命ソファを運び入れて下さったり、思い出話をして下さったり、それだけで、普段私たち家族の見ていないところでの祖母への温かいケアを、肌で感じることができました。

言葉に尽くせないほどの感謝の気持ちで、長いお手紙になってしまい申し訳ありません。

最後に一つ、お詫びがございませぬ。

いつも、祖母のことを下の名前で呼んでくださる方も、いらっしやいました。家族としてすごく嬉しかったのですが、職員皆様のお名前をこちらから、お呼びすることができず申し訳ありませんでした。

本当はお一人お一人にお礼を申し上げたい気持ちでいっぱいです。

大変なお仕事だと承知しています。ご自身のお体あってのお仕事と存じます。中には長く続けられない方もいらっしやるかもしれません。

ですが、祖母が何度も高熱や感染症にかかりながらも、最期を穏やかに迎えられるのも、献身的な温かい皆さんのお気持ち、ケアがあったからこそだと心から感謝しています。

ぜひとも、末永く、加古川の地域全体を巻き込んで、しいては国内の介護施設のモデルケースとして、日々ご活躍いただきたいと切に願います。

6年間本当にお世話になりました。

せりりょう園の皆様とのご縁に心から感謝いたします。

お体を大切に、皆様のご多幸を心より祈念いたします。

ありがとうございました。

平成二十八年 九月 十一日

河野 常子 親族 一同



## 平成28年9月30日(金) 晴香うららさん コンサート



利用者の若き時代の流行歌を選曲され、参加された皆さんと一緒に口ずさんだり、歌に合わせて手拍子したりしながら楽しまれていました。

マイクを利用者の方に向けられ、握手をしながら歌を披露して頂き、晴香うららさんを身近に感じられたと思います。最後は、新加古川音頭に合わせて、炭坑節を利用者の方も職員と共に踊りました。



高野山 真言宗 宝蔵寺 新見<sup>こうい</sup>好威 住職

本日の仏教講話は別府町の宝蔵寺 新見好威住職です。私は初めてお目にかかるので、寺院をインターネットで検索してみました。宝蔵寺は奈良時代天平年間開基の寺院で、多木久米次郎氏が神戸オリーブ園から苗木を譲り受けた日本最古(明治19年)のオリーブの木があります。そのような由来で加古川にオリーブの木が植えられるようになった事を知りました。

ご住職は小雨の降る中、絵や版画等の入った大きな袋を抱えて来て下さいました。宝蔵寺は高野山真言宗の末寺ですと話されご講話が始まりました。まず、絵等を見せて頂きながらお話を聞きました。

写 真：宝蔵寺が写っています。ここには桜の木が7～8本あり、桜の季節には境内が満開になり、見事です。

切り絵：宝蔵寺の本堂と山門を描いた切り絵です。

水彩画：宝蔵寺の絵ですが、元高校の校長先生が定年になってから描かれたものです。美術の専門ではないそうですが、たくさん描かれています。

版 画：高野山奥の院を遍路されている版画です。一の橋から奥の院に行くまでの橋が描かれています。四国遍路で88ヶ所周り、奥の院が最終にお礼にお参りする所です。何で88ヶ所と言うのかは諸説あるそうですが、一つは男の厄が42歳、女の厄が33歳、子どもの厄が13歳、足したら88という説、または水銀の鉍脈がある所が四国に88ヶ所あり、仏様の金箔に水銀を使ったりしていた処からという説等があるそうです。今は観光化していますが、昔、お大師さんは一度自分で歩いてみて、目で見て、自分で感じ、真言宗の教えを説いていきました。

この後、ご自身の話をして下さいました。「自分は何回も挫折したし、子供の頃はそんなに勉強もせずに遊びまわっていました。そんな自分に親は何も注意しないでいてくれました。自由奔放に育ちました。母親は『この子は神器晩成である』と言ってくれました。その母の一言で横道にそれなかつたと思っています。褒めてあげる。怒ってばかりいると気力がなくなってしまう。かの山本五十六さんが言われた言葉があります。『やってみて、やらせてみて、褒めない人は動かない』、皆さんもお孫さんやひ孫さんが来られた時は褒めてあげて下さい。平山画伯も絵が売れない頃に美術評論家から褒められた事で、自信がつきそれが絵に表れて売れるようになられました。兄弟等でも自分の存在を認めて欲しいと願っています。分け隔てなく、良い所を認めてあげて下さい。」と話されご講話は終わりました。

お話を聞きしながら、褒めるという事は子供だけではない、社会に出ても相手の良い所を認め、お互いに成長していく事の大切さを感じました。

今日は本当にありがとうございました。

(岡村 照代)

ロンドンアンサンブルコンサート中止のお知らせ

毎年恒例のロンドンアンサンブルコンサートは、ピアニストの松村美智子さんが体調不良のため、中止とさせていただくこととなりました。

体調回復をお祈りし、来年は開演出来ることを心待ちにしております。